

TS転生口りをメス堕ち させる話

TEAM—POCO/CHIN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貞操観念と性別の偏りが異常な世界にTS転生した口りがふたなりTNTNに屈服
してメス堕ちする話。以上。

目 次

はい、よーいスタート	1
おまたせ！ 睡眠薬入りしかなかつたん だけどいいかな？	
下拵えか何か？	
示談の条件	
変態糞幼女	
入つて、どうぞ	
お前精神状態おかしいよ…	
正体現したね	
勝つたな。風呂入つてくる。	
一転攻勢	
デート・ア・バイブル	

はい、よーいスタート

物心がついたときに俺は確信した。俺には前世の記憶がある、と。

おおよそ20年分のものだろうか。はつきりとしているのは己の行動によつて起きたことやそれによつて蓄積されたものという自分中心の記憶だけ。その他は酷く曖昧で思い出そうにも思い出せそうにない。そんな中途半端な記憶。

ただ、そんな曖昧な記憶ではあるが少なくともこれから生きていくための道標の一つとしては役に立つだろうとは思つてゐる。知識の少ない幼児からのスタートに比べたら破格の人生のスタートの仕方だ。

さてそんな俺ではあるが、今世に生まれて一つ最悪なことに気づいてしまつた。前世の記憶が無ければ気づくことはなかつただろうこと。それどころかもしかしたら受け入れていたかもしれない事実。

それは、この世界は貞操観念と性別の偏りが異常な世界だということだ。現代日本に生きた前世の記憶と共に人格も引き継がれている俺は、勿論常識もそちら寄り。前世とはかなり異なるこの世界の常識は正しく異世界のものという感じがする……というより完全にヌキ目的の男性向けエロゲーだ。

なんせこの世界、男性という性別は存在せず、それに該当するものとして“ふたなり”というものが存在する。そう、ふたなりだ。つまりこの世界には女性しか存在しないのだ。しかも全員が全員明らかに外見美少女で、失礼ではあるが醜いと感じる娘は一人も見当たらない。そしてどこにでも使用済みコンドーム専用のゴミ箱なんて目も品性も疑うようなものがあり、お察しの通り誰もが発情期が如くやっているので外に一步足を踏み出せば性臭が漂つてくる。そんな性に寛容どころじゃない世界。

これを聞くと早計な輩は可愛い女の子とエッチし放題で最高じやないかと勘違いするだろう。しかしそれは自分が当事者ではなく傍観者の立場にいるからこそ言えるのであって、俺のような当事者になつたときには軽々しく言えないはずだ。上述したようにこの世界は女性しかいない。ということは必然的に俺の体が男性のものであるはずがなく……

そうだ、俺も女性の体になつていて、そして息子はついていなかつた。ガツデム。

なんてことだろうか……俺は前世では間違いなく男。恋愛対象は女の子でこの点においては全くの無問題だが、間違つても凹に凸を入れられたいとは思えない。他人の男根なんて御免蒙る。例えそれがふたなりであつたとしてもだ。

しかも俺は記憶の限りではまだ前世で誰とも付き合つたことがなく、息子も新品同然であつた。まさか童貞のまま散り、処女になつてしまふなんて……息子の喪に服さねば

なるまい。

ただ、まあそれでも悪いことばかりではなくて、俺もこの世界の法則故か容姿が整っていた。白髪に透き通る様な青い瞳で童顔。全体的にすごく可愛らしい。現在まだ六歳ということで幼いがこれから成長していくばたぶん美少女になるだろう。こればかりは救いで、未来が少しだけ楽しみだ。

——そう思つていた過去の自分を俺はぶん殴つてやりたい。

ほとんど成長しなかつた。このエロゲーみたいな世界で性捕食されたくないがために必然的にほぼインドアの生活を送ることになったのが良かつたのか喜ばしくも日々をほぼ何事もなく平和に過ごし、高校入学目前まで漕ぎ着けられたがまつたくもつて体は大人に近づかない。身長147センチのロリ体系のまま小学生から固定されている。いや多少成長はしているが流石に口りなのは納得できないという問題である。事あるごとに小学生と間違われるのは屈辱だ。周囲もそれだからかつてくるし更に屈辱だ。

しかも何故か体は成長しないのに全身あらゆるところの感度は日を追うごとに高まつてきているというおまけ付き。そりや俺だつて自慰はするが、それでこうなるのは謎だ。これもこの世界の法則なのだろうか？

まあ何はともあれ――

「ほんとなんで身長伸びないんだよ……」

「ほんとにねえ、何でこんなにちつちやいんだろうねえ？」

「うひやッ!? お前いつからつ……ってそこは関係ねーだろうが、触るなッ！」

高校入学のため制服の採寸と注文に出かけ、改めて自身の口リロリしさを思い知られたその帰り道。偶然にも遊びにでかけていたらしい今世における妹、百合川刀華（ゆりかわとうか）と出会った。しかも出会つて早々に背後から胸を触られると同時に身長と胸の大きさを馬鹿にされた。

別に俺は自分の胸の大きさにこだわりは全くないが、それを身長と一緒にからかわれるのになんかむかつく。妹が高身長で巨乳なぶん余計にだ。

「ねえ姉ちゃん、今暇？ 暇だつたら一緒に遊びに行かない？」

「遊ぶつていうとお前のお友達もいるんだろ？」

「いるよー」

「なら俺いらないじやんか。俺いても俺が居づらいだけになるじやん」

妹の誘いに乗つた後の結果は明瞭だ。妹の遊び友達は全体的にキラキラキヤピキヤピしている所謂陽キヤと呼ばれる部類の子たち。そんな集団の中に俺みたいな人見知りが入つたところで緊張とコミュ障を発動してただ後ろをついていく金魚の糞になるだけだ。いる意味がないし、俺にストレスが溜まつて時間を無駄にするだけだ。このまま帰宅して部屋でゲームをしていた方がよっぽど有意義だろう。

「ええーそんなことないよー皆お姉ちゃんとお話してみたって言つてたよ？ ね？ だから行こうよおー」

妹が背後からそのまま俺の体を抱きしめる形で持ち上げ、ごね始めた。こいつ良い返事が聞けるまで逃がさない氣だ。

「おーろーせーよつ！」

「どうせ家に帰つてゲームかオナニーするだけでしょ？ 引きこもつてないで一緒に遊ぼうよー」

「ばッ!? おおお、オナニーなんかしてねえから！」

「お姉ちやん、私知ってるんだよお。お姉ちゃんが毎日パソコンでエロ漫画見ながらオナニーしてるの」

「え……あっ、え」

動搖と羞恥心のあまり言葉が出なかつた。こいつ、何で俺の自慰事情を知つて……

——結局、俺は込み上げる羞恥心と気まずさに押し黙り、そのまま妹に手を引かれていくことになつた。



——私の姉、百合川猫ははつきり言つてぶに口リだ。それも無差別に股間のアレをイララさせるような悪いぶにしこ口リだ。きれいな白髪のショートヘアにジトつとし

た目の中にある宝石のような青い瞳。膨らみかけ程度の乳にイカ腹の典型的な口リ体质なのに尻と太ももがでかい。その癖本人は自分の性の魅力がわかつておらず、むしろそういうことを恥じている節がある。更に引きこもりの根暗っぽい習性しての癖に口調や態度は不良みたいに強がりのイキり虫で……正直これは我慢ができないのも致し方無いと思うのだ。

本人は最近体が敏感になつてきていると不審に思つてゐるみたいだが、それは当然だ。なんせ私が幼いときから姉が眠つてゐる間に、劣情を煽る生意気なメスガキへのお仕置きとして、またもつと姉が魅力的になるようになると体に調教を施してゐるのだから。ゆくゆくは本人が起きているときにぐちやぐちやにしてオナホにしてやろうと思つてゐるが、まだそうするには練度が足りない。もつと姉の体を開発して熟成させなければならぬ。

しかし、そうしたいのは山々だが私一人では限界がある。そこで私は中学生になつてからは姉への施しを親友にも手伝つてもらうようになった。

「ほら、ここ」

「お友達の家？ 結局屋内じやんかよ……」

「家に独り引きこもるのとは全く別でしょー」

今日だつてそうだ。いつもとは違い、初の親友宅での試みではあるが問題ないだろ

う。なんせ姉は無防備でチヨロいただのメスガキなのだから。

おまたせ！ 睡眠薬入りしかなかつたんだけどいいかな？

「こんにちはー、百合川ですけどー」

大きく小奇麗な家々と、その所々に緑が設けられた閑静な住宅地。そんなに大きな声を出していないはずの妹の挨拶がやけに響き渡る。そんなところを鑑みるに、どうやらここは高級住宅地のようだ。どこもかしこも整備が行き届いていて清潔感が保たれている。家の近所のように品性を疑うような例のゴミ箱なんて通りに見かけなかつたし、そのおかげかこの辺りでは性臭がしない。素晴らしい。俺もこんなところに住みたかつた。

そんなことをつらつらと考えながらしばらく玄関前で待機していると、扉の向こうからぺたぺたという足音が聞こえ、妹のお友達宅の玄関口が開かれた。そしてそこから身長160センチ越えの妹と同じくらい背や胸が大きい、茶髪で三つ編みを背面に流した可愛い女の子が出てきた。ついでに性臭も漂ってきた。スンツ……

「いらっしゃい待つてたよー」

「いらっしゃい待つてたよー」

「いや遅くなつてごめんね。来る途中でお姉ちゃん見つけてさ」

そう言うと妹は背後にいた俺をこのオサナというらしい少女の前に引っ張り出した。やばい。突然初対面の人の前に出されて緊張して何をどう話したらいいのかわからなくなってきた。頭の中が真っ白だ。

「え、ええと。ど、どうも。刀華の姉の百合川猫です。きよ、今日はよろしくお願ひします。えつと……」

「あ、どうもはじめまして。いりょしおさな入好幼納です。こちらこそよろしくお願ひします。今日はゆっくりしていつてくださいね」

ほつと一安心。何とか咄嗟に自己紹介と挨拶ができた。いきなり目の眩むような美少女の前に立たされてお話とか童貞根暗には刺激が強すぎて辛すぎる。相手がほんわかしてる人で良かった。これが怖い人だつたら絶対そのまま石になつてたわ。

——と、そうやつて俺が安堵してると同時に横槍を入れて困らせてくるのが妹だ。

「ちよつとお姉ちゃん年下相手に何緊張しちゃつてんの？ いつものツンツンした強気なお姉ちゃんはどこ行つちやつたの？」

「え、なつ、う、うるさいな……！ お前は余計なこと言うなよ！ だいたい私は別に」

「はいはいはい」

「お前なあ……！」

10 おまたせ！ 睡眠薬入りしかなかったんだけどいいかな？

「ふふ、仲がよろしいんですね」
「あ、え……くツ！」

入好さんがにこにこしてゐる。そして妹は俺の頭を撫でながら憎らしいくらいにやにやしてゐる。くそつ、何だか俺が一人だけはしゃいだみたいで恥ずかしい。これだから嫌なんだ妹は……！

「あーもーほらお姉ちゃん機嫌直して。いい加減中入ろ？ いつまでも外にいるのはね」

「ええ。それにお菓子とお茶も用意してありますから、ね？」

なんだかナチュラルに子供扱いされてる気がする……でもまあ確かにいつまでも玄関前つてのはなんだからな。

そんな感じで俺はどこか釈然としないながらも入好さんの家に上がりせてもらつた。そして中に入つて早々に、入好さんはお茶を持つていくから先に部屋でくつろいでいてくれと告げてどこかに消えてしまい、結果的に俺は勝手知つたる妹に手を引かれ二階の入好さんの部屋に入好さん本人より先にお邪魔することとなつた。そして現在何故かテーブル前で胡坐をかいている妹の足の間に強制的に座らされている。逃がさないというように腹を抱かれて。

「おい、流石にこれは恥ずかしいから放せ。ここ人の家だぞ」

「えー？ 別にお姉ちゃんだしよくない？」

「お姉ちゃんだしってなんだお姉ちゃんだしって」

昔からこの妹は俺に対しての扱いがぞんざいというかなんというか……：

そんなやり取りを交わしていると丁度、4人分のお茶とロールケーキが乗つたトレーを持った入好さんがにこにこしながら部屋に入ってきた。

——先程まで見かけなかつた知らない女の子と一緒に。

「おーりつちやん！」

「お久です先輩。遊びにきました。あれ、その子誰ですか？」

黒髪ボニテで眼鏡をかけた知的でクールそうな他二人よりちよつと背と胸の小さい美少女。本人の発言から後輩であるらしいが……失礼ながら何だかちよつと怖い。

「あーこれ姉の猫。こつち来る途中で拾つたから一緒に連れて來た」

「お前言い方に悪意ないかそれ……」

「あー成程……えつと尾尻律詰おじりりつです。中一で先輩にはいつもお世話になつてます。よろしくです」

「ああ、ええと百合川猫です。こちらこそよろしくお願ひいたします」

そそくさと丁度緩んだ妹の拘束を抜けて立ち上がりきちゃんと挨拶を交わす。

中一というと妹の一つ下か。話してみた雰囲気としては落ち着いているというか感

情の起伏が少ないというかそんな感じがする。

「はいじやありつちゃんも好きなとこに座つてね。今日はロールケーキ用意したからね。皆で食べよ」

「うす。じゃあ隣失礼します」

そう言うと尾尻さんは妹の右隣に腰掛けた。俺も妹のテーブルを挟んだ向かい側、失礼ながら入好さんの隣に腰掛けた。妹の横にいると何をされるかわからんからな。

「ねえお姉ちゃんさー何でそんなに離れるの？ 私寂しいな〜」

「お前の隣とか碌な目に遭わん」

「えー何それ」

「お姉さんは随分トウカちやんに愛されてますね。はい、お茶どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

愛されているというよりは玩具として扱われているって感じだけど……：

——と、そんな感じでその後俺は、出されたお菓子とよければどうぞと入好さんに頂いたおかわりを食べながらわいわい姦しくも何だかんだ皆とのお喋りを楽しんだ。来る前は会話が碌にできないだろうと考えていたがそんなことはなかつたぜ。入好さんは結構積極的に話しかけてくれるし、尾尻さんとは趣味のゲームの話で盛り上がった。妹は知らん。

ただ途中から久々にわいわい楽しんで疲れたのか眠くなつてしまつた。しかもかなり辛い。それを見かねたのか三人は寝ても構わないというがここで寝るのは……結局俺は眠気に抗えず、失礼ながらお言葉に甘えて少し眠らせてもらうことにしておやすみなさい。



「眠つたね」

「眠りましたね」

「薬効くの早くないです？」

「お姉ちゃん色々とクソ雑魚だからなあ！」

睡眠剤入りのお茶とお菓子を美味しそうに食べたお姉ちゃんは、完食から三十分程度で眠つてしまつた。一応安全面を多少考慮して少量で効果の薄いのを用いたのだが……逆にこつちが心配になつてくる。

「まあ取り敢えずちやつちやと始めちゃお。すぐ寝たとはいえ、時間はそんなにないからね」

そう言うが早いか私も一人も下半身の怒張したそれを露出させ、お姉ちゃんをベットの上に運びこんだ。お姉ちゃんは口リ体系で軽いから持ち運びが楽で助かる。

「あー先輩、取り敢えず私初参加なんで、どこまでやつてるか聞いていいですか」

14 おまたせ！ 睡眠薬入りしかなかったんだけどいいかな？

そうやつて次にベットに寝かせた姉の衣服を脱がせていたところ、唐突にりつちゃんが横から質問してきた。そのことに、そういえばりつちゃんは今回初参戦だつたと思い出す。お姉ちゃんをいじることばかり考えていてそこを失念していた。

オサナっちは中学校入学から少ししての段階でメンバーに加わつてもらつているからいいとして……さて、ではまず何からりつちゃんに教えようか。姉の衣服を脱がしながらそう考える。結構たくさんのこと姉の体に仕込んでいるから迷つてしまふ。「うーんそうだねー。じゃああれから見せようかな！」

そう言つて私は姉の方に移動した。

下掠えか何か？

「それじゃあ今からお姉ちゃんを発情させるから、見ててね♪」

そう告げて早速、私は股間のいきり立つたイチモツをお姉ちゃんの鼻にひとりと押し付けた。お姉ちゃんの吐息が当たつてちよつとくすぐつたい。

「オツ
♥」

途端にプシツつとお姉ちゃんの下半身から液が軽く噴出し、体をぶるりと震わせる。そして直ぐ様無意識の内なのかお姉ちゃんは鼻をひくひくと動かし、私のイチモツのくつさい臭いを嗅ぎ始めた。

ふと体の方に目を向けてみれば、お姉ちゃんの陥没乳首が乳首は埋もれたままに、胸の大きさに対してもつとい乳輪だけが下品にもぷっくりと膨らんでいた。下の方の突起も皮から飛び出して痛いほど充血して箸で摘まめそうになっている。

そのいやらしい情景がすつごく股間に響く。私も更に興奮してきて、鈴口からガマン汁が漏れ始めた。

「はエお……
♥」

そして次の瞬間、私のそれを敏感に察知したのか、お姉ちゃんは条件反射的に小さな

舌でちろちろと私の肉棒の裏筋や亀頭を伝うカウパーを舐めだした。とつても可愛くてとつてもスケベで興奮が高まる。ガマン汁が更に溢れてきちゃう。我ながらいいことを覚えさせたものだ。

「はえ～すつご～いえつちですね」「でしょ？」

「かわいいよね、たぶん起きててももう同じ反応するんじゃないかしら」

その様子を眺めていたりつちゃんはいつもの真顔ながらも手を軽く上下に動かしており、オサナつちはにたにたとしながら鼻息荒く手をわきわきとさせていく。いつもの清楚なオサナつちでは見られない口リコンの顔をしている。

「あ、そうだ。ねえりつちゃんさ、ちょっとお姉ちゃんのお腹撫でてみて」

お姉ちゃんが発情しだした今。眺めさせているだけなのは何なので、次にお姉ちゃんを脱力させたり安心感を与えていたためのスイッチを教えてあげようと思う。

「ふあ……♥」

「あーいいっすね、これ」

りつちゃんは言われるままに優しくお姉ちゃんのお臍周辺をさすりだし、そして触れ始めはぎこちない手つきだったのが途端に堂々としたものに変わつていつた。お姉ちゃんはぷにぷにしてて触り心地がいいからこれは今後病み付きになるんじゃないか

な～りつちゃん。

「フニヤ……♥ にや♥」

撫で始めて少しして、ペろペろと動かしていたお姉ちゃんの舌が力なくだらりと垂れる。そして先程まで若干力んでいた下半身や手が緩み、ベットに沈んだ。

「お姉ちゃんお腹撫でてあげると安心するんだよね」

「これほんといいつすね」

「ぷにぷにで気持ちいいもんね。ちなみにもうちょっと下を撫でてあげるとね……」

そう言つて今まで待機していたオサナっちがりつちゃんの横から手を伸ばし、お姉ちゃんの下腹部——ぷに穴の少し上あたりを少し指で押す程度の力で撫で始め、もう片方の手でお姉ちゃんのぷに穴をくぱあと開いた。瞬間、お姉ちゃんの体が軽く痙攣し——

「うん♥」

「あ、漏らした」

我慢していたのか、綺麗な放物線を描いて長々とかなりの量のおしつこをオサナっちのベットにまき散らした。これも随分前に覚えさせた芸だ。

お姉ちゃんの様子を伺つてみれば眠つていながらもだらしない顔で軽く痙攣して、完全に放尿の快感に浸つてている。最近はおしつこすることで快感を感じるようにと

尿道の開発もしていたので、その良い結果が見れて嬉しい。ちんこが喜びに震える。

「あら人の寝具にお漏らしするなんて悪い子ね。これは後で問い合わせないと」

オサナつちがいつも増して犯罪者みたいな顔してる。これはお姉ちゃん後で絶対死にたくなるだろうなあ。楽しみ。

さて、それはさておきお姉ちゃんの粗相を見ていたりつちやんだが、そろそろもつと弄り回したくなつてきたのかうずうずしだして完全に落ち着きがなくなつていた。こは私も早くお姉ちゃんと遊びたいのでさつさと開発を始めてしまおうか。

「そういえばりつちやんって後ろの穴が好きだよね」

「ん、そうつすね。相手のお尻を掘つたり弄り回すのが好きつすね」

「なら丁度よかつた。お姉ちゃん今お尻の開発してるんだけど、よかつたらやんない?」

「え、いいんすか? なら是非」

お姉ちゃんの後ろの開発をしていいと知った途端、りつちやんの長いイチモツが一回り大きくなつた。

りつちやんは学校でも噂になるくらいケツ穴狂いで、相手になつた女の子で肛門アクメジヤンキーに陥る子が続出したくらいだ。これはお姉ちゃんたぶん今後トイレ中もアクメ極めるくらいやばくなるんじやないかな。そんなふにロリオナホ街道まつしぐらなお姉ちゃんの未来を想像してしまうくらいには凄く楽しみだ。

「ちなみに開発するときはお姉ちゃんの耳元で覚えさせたいこと囁くといいよ。お姉ちゃんが覚えやすいから」

お姉ちゃんが眠っている間に耳元で囁きながら致すとそれを潛在意識に刷り込むことができる。こうするとお姉ちゃんの肉体はエッチなことを早く覚えてくれるし、無意識の内に色々なことをするようになる。所謂催眠音声のようなものだ。この手法を用いてお姉ちゃんには今までオナニーでセルフ開発させるようにしたり、一回のオナニーじゃ満足できないようにしたりと色々仕込んだ。

「あ、盛り上がってきたとこ悪いけどちよつと待つてね。その前にいつもの媚薬。これを塗り込んでいかないと」

と、早る気持ちが滲み出てきていた私たちに待つたをかけ、オサナっちはベットの下からお姉ちゃんの体の感度を上げるために用いている媚薬とそれを塗り込むためのゴム手袋を取り出した。

これはオサナっしが毎回用意してくれているもので、効果もお値段もかなりお高いやつだ。何せ触手からとれたものを更に調整して効果を高めたもので、塗った場所の感度がどこであれ確実に上がるものなのだから。

お姉ちゃんには毎回これを薄く塗り込んでいて、少しづつ感度を上げている。いきなり上げると流石に鈍くてチヨロいお姉ちゃんでもばれてしまう。

「取り敢えずこれを先に塗り込むから、浸透するまで少し待つてね。手やちんちんに着いたら大変なことになるから」

そうして媚薬の取扱方や注意点を説明しながらオサナっちが実際にゴム手袋をしながらそのドロドロとした白濁液をお姉ちゃんの中も外も全身隈なく塗り込んでいく。すると、全身ヌルヌルのベトベトに汚されていくお姉ちゃんはびくびくと痙攣しつぱなしになり、時節途切れ途切れにエツチな声が口から漏らし始めた。

そんなスケベな姿を見ているとイチモツがうずうずしてきて、イチモツ自体がさつさと犯せと私に囁いているような感覚に陥る。理性がどんどん削られていく音がする。「はいできた。取り敢えず媚薬が揮発するまで待つてね。だいたい3分くらいですぐだから」

「うつす」

「いつもありがと～オサナっち～」

そうして暫く、短くも長く感じた待ち時間をエツチな口リガキを眺めて過ごし、皆の心も体も高ぶったところでやっと媚薬が揮発した。

お姉ちゃんの体は軽く痙攣しており、媚薬の影響か白い肌が赤く火照り、下の口が大洪水でパクパクいやらしく何かを求めている。しかも脱力しているせいか何なのかお姉ちゃんは半目で若干あへっている。いつもの完全に出来上がった状態だ。

このいやらしく誘う欲しがりなメスガキに媚薬が乾く間実質的に焦らされていた私たちの理性はもう蒸発寸前だ。いつも涼し気なりつちやんもギラギラとした野獸の如き眼光をしているし、オサナつちも自分を抑えるのに必死なのか真顔になつていてる。

「ね、ね、先輩、もういいっすよね？ お尻やつていいんすよね？」

「いいよーでも前の穴は駄目ね。ここは完全に堕とすときまでとつておくんだから」「私もそろそろ限界かな？ やつちやいましょ」

「うんもうやつちやおうか」

「やつちやいましょよ」

三人同意見でもうおっぱじめる気満々だ。これ以上我慢することはできない。
ということで早速、リつちちゃんは後ろの雌穴の前に、オサナつちはお姉ちゃんの脇に、私はこのまま頭の方にそれぞれ陣取つた。さあお楽しみの始まりだ。

示談の条件

——バチュンツ！ バチュンツ！

肉と肉が激しくぶつかり合う音、獣達の荒い息、そしてメスガキの嬌声が部屋の中を埋め尽くす。

「ほおらお姉ちゃんもつとおちんぽ様に御奉仕しようね～、貰った精液エサもちやんと噛んでくちゅくちゅしようね～」

「ふつ……ふつ、ろ、ロリの下品なか、体ツ！ もつと、もつと下品に開発しなきや……ツ
！ フヒヒ……！」

「このツ……！ このツ！ 15のくせして後ろの糞穴はまだおしゃぶりかよ！ そんなだからぶにロリ体系なんだよツ！ いい加減ベビーアナル卒業しやがれオラツエサ！」
さつきとちんこ放せ大腸真っ直ぐに耕すぞオラツ！」

「オゴオ……！ オ、ツ♥ オツ♥」

お姉ちゃんの開発を始めてから数時間。窓から空を眺めれば、既に夕暮れでかなりの時間お姉ちゃんで遊んでいたことになる。

そのためかオサナつちもりつちやんも既に理性が消失しており、周りが見えておらず

各々の世界に浸つてゐる。

オサナっちはロリコン変態魂全開でお姉ちゃんのちつぱいと釣り合わない肥大勃起した乳首と乳輪や、脇、臍穴などを弄り回し、よく分からぬえつちな薬を塗り込んでいる。対してりつちゃんはりつちゃんでいつもの大人しさはどこへやら、暴力性を全開にしてお姉ちゃんの尻穴に長ちんぽ突っ込んで腰をつかつていて。そんな光景を横目に私は私で未だにぐーすか寝てる……というよりは気絶？　してお姉ちゃんに催眠音声の如く声を囁きながら精液の味や食べ方をレクチャーしてあげていた。

「ネコちゃんの乳首大きくなーれ　大きくなーれ　♥」

「ふう、ふウツ……生意気な穴しゃがつて、尻肉もむちむちしそぎだこのメス豚があ！」

——バチンッ！

「オ、ツ　♥」

——チヨロロロ……

「はういそこまでー。もう時間だよ二人とも」

「え、あ、もうそんな時間？　あらら」

「ふう……りよ、了解つす」

時計を見ればもう5時を過ぎていたので、りつちゃんのスパンキングでお姉ちゃんがお漏らしをしたところで二人に終わりを告げる。

もうそろそろお暇しないと。あと少しで帰つてくるだろうオサナっちの両親に迷惑をかけてしまう。それにオサナっちの両親も言わずもがな口リコンだ。お姉ちゃんのこの痴態を見たらきつと大変なことになる。だから終わりにしないと。

「いい時間だし取り敢えず今日はここまでにしないと」

「そうね、そろそろママ達帰つてきちやうだらうし……」

「自分もそろそろ帰らないと姉貴が心配してそうっすね」

「じゃあ取り敢えずそういうことだし、後片付けして今日は解散しちゃお」

そうして各々が完全に落ち着きを取り戻したところで、私たちはお姉ちゃんや自分たちの体に付着したもの拭き取つたり部屋の換気をしたりといそいそとおっぱじめる前の部屋の状態へと戻す作業を開始した。

お姉ちゃんの体を拭いているときは皆下のモノがびんびんに起立したが、各々白濁液を一回お姉ちゃんに飲ませるだけに収まつたため、今回は早く作業が終わつた。オサンっちのベットにできた染みを残して。

「ネコちゃん起きたらこの情けないお漏らし跡で何か約束取り付けないとね」

オサナっち、凄くワクワクしている。しかも悪い顔で。こういう場合のオサナっちに絡まれた口りは大抵碌な目に合わない。お姉ちゃんご愁傷様。

そんな思いを抱きながら私は、びくびく痙攣しながら未だに氣絶しているお姉ちゃん

を起こすべく、手を一定のリズムで叩きながら、ぱに口リに強く呼びかけた。

「起きろメスガキ」

「はひゅつ♥」



びくりとジャーキングが起こり、目が覚めた。寝すぎたのか体が妙にだるい。やつぱ
昼間は寝るもんじやないな。

そう思う傍ら、体がふわふわとしたものに沈み、ぬくぬくとした気持ちよさを感じる。
どうやら俺はいつの間にかベットの上か何かに運ばれていたようだ。入好さんだろう
か、申し訳ない。

「お姉ちゃんやーっと起きた。もう帰る時間だよ」

「え?」

まだ寝起きで寝ぼけているのか、起きて早々妹にかけられた言葉が帰宅するというも
ので一瞬何を言っているのか分からなかつた。纏わりつく眠気を払つてベットから身
を起こし窓から外を眺めてみると、既に空は真っ赤に染まつていて。このことを鑑みる
に俺はかなりの時間爆睡していたらしい。

人の家で爆睡するとかやばい、恥ずかしい。入好さんには重ねて迷惑かけて本当に申
し訳ない。

「あ、それとお姉ちゃんさ。ちょっと布団見てもらえる?」
 「え、何?」

妹に言われた通り、視線を寝ていた寝具——主に股間の辺りに向けたその瞬間、俺の頭の中は眠気と共にあらゆるものが吹つ飛び真っ白になつた。

言葉が出ない。何も考えられない、考えたくない。むしろ死にたい。一瞬の内に色々なものが頭の中をよぎる。そんな、俺もう15だぞ? こんな、もう、こんな歳なのに俺が……しかも年下の子たちの前で粗相なんて……ッ!

顔が熱くなつて湯気が出そうだ。かつてこれほどまでの羞恥があつただろうか、いやない。やだ死にたい消えたい。思わず両手で顔を覆つてしまふ。

「ええー……ちょっと待てよこんな、こんなのってさ……ええ……」

「お姉ちゃん突然お漏らしするんだもん。この歳でさあ~?」

「うええ……入好さん、本当に、すいません……」

妹のその責めるような口調で体と心が縮こまる。発した声も消え入りそうだ。

やばいだろ俺、入好さんのベットにお漏らしとか失礼と羞恥の極みだよこれ。どうすんだ俺、やべえよ……やべえよ……

「あのーあまり気にしなくていいですよ? 仕方ないことですもの」

「いや、でもこれは……本当にすいません……」

「お姉ちゃんちゃんと誠心誠意お詫びしないと駄目だよこいうの」

妹の責めるような口調と視線が痛い。入好さんの優しさが申し訳なさを増進させる。

尾尻さんの何とも言えない表情が羞恥を誘う。

「あの、本当にすいません……何でもするんでお詫びさせてください」

「いえそんな」

「オサナっち、姉が布団汚しちやつて本当ごめんね。何でもしてくれるらしいから何かさせたげて。じゃないと申し訳が立たないから」

「ううん……まあトウカちゃんがそう言うなら」

「そうして入好さんが俺に出したものは——」

「じゃあ今度暇なときでいいので皆で一緒にショッピングに行きましょう。服を見たり美味しい食べ物を食べたり、とか」

入好さんから出されたものは思いの外優しいものだった。むしろお詫びにならないようなことに感じてしまう。

「え、本当にそんなことでいいんですか……？」

「はい、いいんです。私、楽しみにしますから」

「ええと、あ、ありがとうございます！」

ショッピングでいいだなんて入好さんの寛大な心には本当に感謝しかない。俺、許さ

れた！

そうしてその日はお開きとなり、俺は入好さんと尾尻さんと別れ、妹と共に帰路に着いた。ちなみに恥ずかしく、申し訳ないことだが汚してしまった布団は入好さんが片付けてくれるとのことでのこと。本当に情けないなあ俺は……

変態糞幼女

それは正に前門の虎後門の狼であつた。

「うつ、いやア……」

「はいはい文句はいいからまずは早く済ましてきて」

入好さんたちと別れ、自宅へと向かっている途中のこと。御馳走されたケーキを食べすぎたためか何なのか、俺は途轍もないクソデカ便意に襲われた。あまりにも状況が悪く、腹の中で暴れる暗黒龍を鎮めるために腹を抱えてうずくまつてしまつたところ、妹が俺をひよいと軽々抱き上げて近場の公園のトイレへと運び込んでくれた。

いつもは生意気で俺に嫌がらせばかりするようなクソ妹だが、今回は本当に助かつた。本当に本當にありがとう……ただただ感謝。

だがしかし、少し待つてほしい。

ここは人氣がないとはいえ公園のトイレ、家の外のトイレだ。少なくとも一度か二度ならず、何十とは発展場になつていて。それは絶対に確定している。何せ、トイレの入り口前にいるだけで強烈な性臭が漂つてくるのだから……：

さながらここに立つ俺の気分は魔王城を前にした一般ピーポーだ。

「ね、ねえ刀華……？」

「あのさあ、早くしてきてよ。人が折角親切に運んできてやつたんだからさあ……今更臭いが無理ですとかお子様なこと言わないでよ?」

「うつ……」

駄目だ行くしかない。刀華の機嫌が途端に悪くなつた以上に何かいつもより目が怖い。引くに引けない……行くしかないのかあ……

「ふやツ……」

——ブシツ

ファツ! や、やばい! トイレに足を踏み入れた瞬間頭が一瞬白くなつた……!
しかもそのとき体に何かが走つて背筋がぶるりと震えて、それでその拍子に少し……
う、うウウ……

「止めろ、考えるな……! 偶然、今のは事故、何かの事故だから!」

そうわけもわからず言い訳のように自分に言い聞かせ、取り敢えずふわふわとする頭を抱えながらも無理矢理一切の思考を止める。そうして顔を上げて足をただただ個室へと進めた。

「う、うえエ……」

——どんでもなかつた。

どんだけヤツてんだと問いただしたいほどにこのトイレの個室の扉はとんでもない状態だった。

扉一面白い粘液でべつちやべちや。仕方なしに隣の個室の扉へと目線を向けても、その扉もその扉でかっぴかぴ。その更に隣の個室の扉は何やら手が通る程の穴が空いていてもはや扉として機能していない。

正直触りたくないというか近くにいたくない。もうまず無理です。帰りたい。黄ばんだ精子の壁が視覚と嗅覚にダイレクトに威嚇してくる。

でもなあ……ここで足踏みをしていてはただただ俺が苦しいだけの現状が……か、覚悟を決めるんだ俺……ツ！

——パリパリ……ぬちより
「ヒンツ」

比較的マシだと考えてカピカピの扉に手をかけたところ、罠にかかった。とんでもない二段構え。もうマジ勘弁。

カピカピの膜の下にぬちよぬちよの粘液が隠れていた。少し触れただけで膜が割れて液が溢れてくる……

「おゝい早くしてよお？ 早く帰りたいんだからさあ」「わ、わかつたから急かすなよ……」

妹の圧力の乗つた言葉に押され、俺は意を決して扉を開いた。

「うそん……」

よりもよつて和式だつたあーーツ！　しかも周りに白い粘液が飛び散つて汚い紙も何だか湿氣つてる……今日は厄日か？

でもやるしかないんだよなあ、ここで……刀華も待たせてるし……
「ツツ……覚悟、完了ツ！」



性臭だけでイク情けないお姉ちゃんが散々足を止めながらもやつとこさトイレの個室に入つてすぐのこと。

私は早くしてくれという急かすような雰囲気を作りながらすぐ個室の前へとやつてきた。

「お姉ちやん？　まゝだ時間かかりそうですかね？」

「ちょ待てよ！　まだ俺入つたばっかりだつて！」

そう焦り気味に言葉を吐くとお姉ちゃんはだんまり状態となり、しばらく何の物音もしなくなつた。

うーん静か。いやー静かだなあ。そう思いながら私は扉の前に溜まり続け、一定のリズムで靴で地面を叩き、いかにも待ちくたびれてますという雰囲気を醸し出す。

「な、なあ刀華？　早く帰りたいのは分かるんだ。それは本当に申し訳ないと思つてゐよ？」で、でもさ、あの、その……お姉ちゃんさ、その……トイレの前にいられると恥ずかしくて済ませるものも済ませずらいんだが？」

「へうそななんだ？」で、だから？　早くしろよw」

「ツお、お前なあ！　オツ♡!!?」

「おつ？」

私の急かす雰囲気が嫌がらせだとお姉ちゃんがそこで理解した瞬間のこと。お姉ちゃんは言葉を発するときに力んだのか何なのか。何かが落ちる音と空気が抜ける間抜けな音がトイレに響くと同時にお姉ちゃんの口から情けない声が漏れた。

「お姉ちゃん……」

暫しの無言……

「プツ……フフ w……」

——駄目だ、もう堪えきれない……w!

「アツハハハハwwwツツツ!!? ヒヒヒヒハハハハ!!!」

——開発は成功だ！　やはりリツちゃんに手伝つてもらうという私の考えは間違つ

ていなかつた！

ニヤニヤと、ゲラゲラと、下品なまでにその抑えきれなかつた歓喜を表に晒しながら私は堪らず心の中で今のお姉ちゃんを祝つた。『おめでとうお姉ちゃん、お姉ちゃんのお尻の穴はこれから排泄するだけでアクメつちやうクソザコアナルに進化したよ♡』

「ハハハ w 何今之声？ もしかして大きいの漏らして気持ちよかつたのお？ ちよつとひひひ w w いくらなんでも下品すぎだつて笑わせないで w w w 』

「ち、ちがッ、そんなんじやない！ 倘漏らしてないからアツ！」

私はお姉ちゃんを最大限に笑つて貶して虐めてあげる。すると打てば響くが如く凄く焦つていい反応を返してくれる。そして――

「や、ち、ちが……わ、笑うにやアウオ、オ、オ、ツ!?♡」

半泣きで言葉を吐くと共に、先程の第一波で決壊寸前にまでなつていたのかお姉ちゃんは下と両方の処理穴から下品な音を奏で始めた。しかもそこから漂う排泄物の臭いの中にはほのかに甘いメスの匂いも混じついて……このメスガキ、前のオナホ穴からも汁を漏らしているようだ。

「ちよつとおお姉ちゃん？ いくらなんでも下品すぎい w w w 排泄行為で感じてるとか最低の変態過ぎるんだけど w w w ——ていうかくつき！ くつきすぎんだけど w w

「お姉ちゃんさあ、日頃何食つてたらこんなに臭くなる訳よwww」

「ヒーヒー www しかもどんだけ出してるの w、音も声もでかすぎてこれ絶対こら一
帶に響いてるよ確実に！ これもう後日噂になつてて www」

「やらあア
○
そんなんのやなのお才、オ、オ、オ、
○
!!??」

もはや笑い過ぎてお腹が痛い。しかもメスガキはギヤン泣きオホツて股間も痛い。苦しい。もはやヌかねば無作法つてもんでしょうこれツwwwというか我慢ならない……ツ!!

——その後、私は死んだ眼でその瞳に何も写さない虚無で空なお姉ちゃんが個室から出てくるまで心から笑いながら最高に致した。もう一度やりたいＺＥ☆

入つて、どうぞ

お姉ちゃんが大恥を晒してくれた翌日の朝。朝食の席。いつもなら生意気そうに、朝から嫌に元気そうに語りかけてくるお姉ちゃんが今日はただただ機械的にのつたらくつたらと食べ物を口に運ぶ作業を繰り返している。顔も虚で、私が話しかけてみても消え入りそうな音量で“ん”としか発しない。

明らかにこれは昨日の例のアレが原因だわ。やりすぎちやつた。

そう思いながらもしかし反省はせず、学校へ登校する時間も迫ってきていたのでお姉ちゃんを介護しながらせかせかと支度をする。

「ほらお姉ちゃん、学校行くからいい加減しやきつとして」

「んう……」

「んもお、ほらトイレはいいの？ もう行くよ？」

そう口にした時だつた。お姉ちゃんが一瞬びくりと反応した。そしてその虚な顔が次第に真っ青になり、真っ赤になりと忙しなく変化していき、果てに肩を力ませながら急にせかせかと私を差し置いて早足に家を出て行きやがつた。凄く情緒不安定。これはトイレが完全にトラウマになつてますわ草。そして私への八つ当たり気味な態度が

メスガキのくせしてマジ不遜で不敬。

「ちよつとお姉ちゃん何その態度。朝の支度に気遣いすらしてやつたのに何なの？ マジむかつくんだけどお」

そうお姉ちゃんの背中に言葉をぶつけ、仕返しにさつき着替えのとき反応も示さず好都合だつたので履かせた紐パンを上に引っ張り上げる。

「ンニユイイツ！？♡！？♡？」

「プシツ！ ちよろろろろ……」

このメスガキ、パンツで体を持ち上げられた瞬間玄関前にも関わらず小便漏らしがつた。くつそ朝からナニをイライラさせやがる。

「はあーあのさあ……お姉ちゃんさあ、人に見られるような玄関前で朝からお漏らしとはいひ度胸だなお前なあ？ 犬でもちゃんと弁えるぞお前、なあ？」

「んおつ！ おつ♡ あ♡ う、うるしやいイさつさとおりよせえツ！ ♡」

「あ、？」

「んああ、ツンおお、お、ツ！？♡ ごめんなしやいごめんなじやい許していくにやじやいイ俺が悪かったからああ、ツ！？♡」

「はあ……うむ、よろしい」

あまりにも生意氣でイライラさせるので空中で紐パンを揺すつてぷにまん食い込み

攻撃をかまして謝罪させてやつた。そしてきちんと身の程を弁えたのでパンツを放してやつた。お姉ちゃんはぺたりと地面に座り込んで扇状的にも息を荒くしてこちらを誘惑している。このガキヤアツ……！」

「ほら立つて、早く行くよ。電車乗り遅れちゃうでしょ？」

「ま、あ、待つて……！ 着替え、ちょっと下着替えさせて」

「ダメでーす。私を怒らせた罰を受けなさーい。」

「んあ……ツ♡」

そうお姉ちゃんに告げ、私は無慈悲にお姉ちゃんの地面と股下の間に挟まれたメス臭い汚パンツの紐を強引に抜き取り、乱雑に玄関口から家の中に投げ入れた。

「いい格好だねホント、絶好のノーパン登校日和だよお姉ちゃん？」

「んあ、え……」

そうして私は若干放心気味に青ざめたお姉ちゃんを無理矢理立たせ、強引に手を引いて学校への道のりを進んでいくのだつた。さながら犬を散歩してゐみたいだあ。



月曜日、学校への登校中。家を出てから現在駅のホームで電車を待つてゐる折、ふとここ最近について思うことがある。というのもここ連日のこと、俺は摩訶不思議な悪運イベントに見舞われてゐる。他人のベットにおねしょ。公衆トイレで拭い切れない程

の生恥を晒す……これはもう明らかに何か悪いものに取り憑かれているとしか思えないのだ。

正直もう誰とも会いたくないし、家に引き籠もつていていい。切実に……
今日だつてそうだ。思考停止して いたい程ショック受けて いるつてのに朝から妹に
プライドがぐちやぐちやになるほど弄ばれ たし、現在進行形で更に追い討ちをかけられ
ている。

ノーパンで過ごすなんて……ご丁寧なことに家の鍵は妹に没収され 下着を取りに行けないし、何より手をがつちりと握られているから逃げられない。本当だつたらこんな拘束とも呼べないような拘束なんて即振り払つて鍵も奪還して帰りたいのだが、生憎と俺の力では無駄に高スペックな妹に敵わないのだ。悔しすぎる。

「これから電車乗るけど痴漢には気をつけてね。今のお姉ちゃんはノーパンの変態さんだから相手に知られたら大変なことになるよ♡」

「う、うるさい……」

突然耳元で囁かれて背中がぞわぞわする。お願いだから痴漢のことは意識させないでくれ。

今までの生活で何事もなく平穏に過ごしてこれたとは言つても、完全であつたわけではない。多少なりとも何かしらはあつた。ただ被害の規模が小さかつただけなんだ。

しかし痴漢に関しては笑えない。

俺は中学生になつてから電車で通学するようになつたが、何故か痴漢に遭いやすい。

ただ、今まで軽く尻を揉まれるとか太ももを撫でられるとか嫌なことに変わりはないが我慢できる範疇に収まつていた。何故通報しないのかと言われば、痴漢されているとき予想以上に怖いからだ。一度はこいつ痴漢ですと叫ぼうとしたことがあつた。しかしそれはできなかつた。何故なら痴漢行為を妹も他の乗客も知つていて観るのを楽しんでいたから。こんな状態で叫んだら何されるかわからない。故に俺はただこれ以上痴漢がエスカレートしないよう我慢するしかないのだ。痴漢を受け入れるみたいで嫌だがそうする他ない。それに何かあれば最悪妹が助けてはくれるみたいだから……

そんなこんな色々と考えていたら電車がホームに入つて來た。來てしまつた。そして目の前で停車し、扉が開く。

やつぱり今日は意地でも帰ろうかな。そうだ、そうしよう。学校なんか偶にさぼつたつて大丈夫大丈夫。

「ほらお姉ちゃん、早く乗ろうか」

「離せ、俺は帰る」

「学校さぼる気？ そんなの許さないからあ～」

無理でした。妹の力が強すぎてやつぱり手を振り解けないし、体ごと簡単に引っ張ら

れてしまう。あーあもうどうとでもなれとしか思えん。諦め。

お前精神状態おかしいよ…

ガタンゴトンと規則的に揺れる満員電車、その出入口の前。俺はいつもの平常心を保つため無心で窓から外の流れる景色を見ていた。

いつも通りに振る舞う。なんでもないよう、ただ扉の前に立ち、目的地に電車が停車するのを待つ。とても簡単なことで無意識でこなせる行為だ。そう意識するまでもないことなんだ。それははずなんだが……電車の揺れ一つだけでも短いスカートが翻らないかと意識してしまう。自分がノーパンでいることが後ろの乗客にばれていなかと窓の薄い反射を利用して確認してしまう。怖くて、助けてほしくてチラチラと右隣でスマホをいじっている妹に目線をやつてしまう。そうして常にどうか今日は痴漢が来ませんようにと心の中で祈ってしまう。

こんなのじやどても平常心は保てない。

ああ今日は厄日だ……

——むにゅつ

「ツ！」

電車に乗ってまだ数分、突然何かに脇腹を揉まれた。

今日は厄日だと思ったがどうやら違った。今日は地獄だ。

「猫ちゃんこんにちわ〜」

透き通るような綺麗な声……耳元で囁かれ背中がぞわぞわする。脇腹をわきわきと揉まれむず痒さと不快感がこみ上げてくる。

電車に乗つて痴漢されない日はほほないのだが今日は更に外れを引いた。ノーパンの今日に限つて一番やばい痴漢に背後をとられてしまつた。

「こうやつて会うのは久しぶりだよね……今日も前みたいに時間いっぱいたっぷり気持ちよくしてあげるからね」

「や、やめ……」

「じゃあまずは痴漢の基本、乳首から」

「ツツツ!!?!

咄嗟に声が出ないように右手で口を塞いだ。

「あら？ 前より乳首少し大きくなつた？ んー、心なしか胸も？」

脇下から伸びる痴漢の手がゲームのコントローラーでも持つているかのようにも

にゆもにゆと制服越しに俺の胸を弄び、人差し指で乳首を撫でまくる。

やばい、前よりも胸全体の感度が上がつてゐるのか、それとも痴漢の技量が上がつたのか望んでもいい快感がジクジクと胸から体に響く……！

「ふううーツ♡」

「うーん、何か猫ちゃん前よりもクソ雑魚になつてなあい？ ふふ……」

そう呟くと痴漢は親指と人差し指で既に大きく膨れた突起を摘み、前へ手首を捻り力を軽く入れながら突き出した。

「ぶつ、ふうううツ!!?♡」

腰から一瞬力が抜け、だだでさえやばいのに伸ばされた胸に体重がかかり頭の中で一瞬火花が散る。その際少しちびりそうになつた。

「気持ちよくアクメできたね……でも急に足から力抜いたら危ないでしょ？ だから少しお仕置き」

「う、ツ!!」

そんなのただの言いがかりだなんて言葉が一瞬頭に思い浮かぶも、乳首をギリギリと痛いくらい捏ねられ、すぐ頭の中が痛みと僅かな快感で埋め尽くされてしまいともに言葉にできない。

「い、痛い……！」

「痛くしてんんだから当たり前だよね？」

そこからしばらく俺の乳首はギリギリと痴漢の指に痛めつけられた。現実じや高々数分だろうけど、俺の体感じや数時間に感じられる程いじめられた。そうして俺の頭が

痛みと快感で破裂しそうになり、目尻からポロポロと勝手に涙が溢れ始めた頃のこと、突然痴漢の手つきが激変した。

「はへつ……お、つ♡ あつ♡ アツアツアツ……♡」

乳首の根本や乳輪を爪でカリカリと、時には指の腹で触れるか触れないかという感覚でさわさわと優しく弄られる。

ただでさえ敏感だつた弱点ところを痛めつけられて真っ赤にこりこりに膨れて過敏になつてたから、くすぐたつさやむず痒さを伴う優しい刺激を余計に感じてしまい体中がゾワゾワし、ぶるりと震えてしまう。

「んおつ♡ ん♡」

「どお？ 痛い痛いが急にいいこいいこになつたら気持ちいいでしょ」

お、ツ♡ これやばい♡ 痒れるような痛みを負つた所をそんな焦らすように優しくされたら淡い快感がピリピリとじんわり体に染み渡つて……♡

「これもうイキソ……イクツ！♡

「はいダメ」

「んえ……？」

あと一押しという瞬間、突如痴漢のお姉さんの指が体から離れる。
な、なんれ……

「これはお仕置きなんだから、猫ちゃんを喜ばせたらいけないよね。だからそんな物欲しそうな顔してもダメよ?」

そう告げるや否や、また痴漢のお姉さんはカリカリさわさわくるくると今度は乳首にぎりぎり触れないように乳輪を刺激し始めた。そうしてまた俺がイキそうになると触れるのを止め、一旦間を置いたらまた弄ぶ。

そうして暫くこの行為を繰り返された。

「は、はへつ……も、もうゆるひて」

「ん~どうしよつかなあ~」

「もうい、イカせてくらひやい」

頭がどうにかなりそうだった。焦らしに焦らし尽くされた乳首は真っ赤に上を向き、ぴくぴくと体が痙攣し、腰が今にも碎けてしまいそうだ。

「ちゃんと反省した? 乳首でもの考えてない?」

「んえ、うう……ツ。あ、あのもう限界なんれしゅ、お願ひしましゅお姉しやん……♡」

「もう、反省の意図が見えないなあ……でもまあ猫ちゃんにトロ顔で媚びられちやあ仕方ないわね」

あ、ああ……やつと……♡

「ほら、乳首だけでアクメ決めちやう変態にやんちゃんに特別に『褒美』

「ツツツ!!!!
♡♡♡」

頭がホワイトアウトする。パチパチと何かが弾け、お股から何かが込み上げ、悲鳴にも似た嬌声をあげそうになる。それでも何とか残つてた理性の欠片によつて溢れそうになる何かと声を歯を食いしばり食い止める。

「気持ちよかつた……何て聞かなくともそのだらしない顔を見れば丸わかりね」

イツたときに背が少しのけぞり、顔が上を向いたためか私を見下ろすお姉さんの綺麗な、クスクスと私を嘲る顔が見えた。

途端、私の心に羞恥心や後悔といったものがゆっくりと込み上げてくる。

——お、俺は……っ！

そう思つた瞬間、お尻をむにゅりと掴まれると同時に見上げていた痴漢の顔が驚嘆に染まる。

——やばい！

その言葉が頭を駆け巡つたときには痴漢の顔はいやらしく歪み、すでにその手は前の敏感な屁を素早く皮から剥き出していた。

「ツツツ!!!!
♡♡♡」

剥かれた刺激で頭が白くなり、咄嗟に歯を食いしばり口を両手で塞ぐ。

「ふふ、呆れた。もう何も言わないわ、露出狂の変態さん」

そう囁くと痴漢はその顔を歪め、俺の豆を指で摘み扱き上げ、もう片方の手のその長細い指を穴の中に入れ、入口あたりの天井をひつかくようく揉み込み搔き出すように擦り始めた。

もはやどうしようもないだろう。そんな思いと共に俺の理性は第三者視点のように快感に耐えられず痴漢に翻弄され、声を抑えるだけの自分を客観視していた。周囲に嬌声を響かせまいとしているが、すでに下の方はぐちゃぐちやと卑猥な音を奏で、チラリと妹を見ればニヤケ面。窓に映る乗客もニヤニヤしたりソワソワしたりズボンにメントを作りながらも何もアクションを起こさず見物している。

もうどうしようもない。俺に後ろから張り付き前を弄る痴漢。お尻に何か硬い大きなものの感触を感じる。

もはや俺はここまで……そう理性は諦めてしまつてきている。

「ぶ、ぶびつ、ぶふううううむうううーーーツツツ　♡♡♡♡」

「ふ、ふふふ……そろそろ十分ほぐれたかしら？」

じやあ早速——

怒張したそれをあてがい、俺の最後の砦が崩されようとした、その時。

——ガシツ、ズチュン！

「んお、ツツツ　♡♡♡」

——ドピュツ

情けない声が大きく響き、尻に温かいものがかかる。

何も衝撃が来なかつた俺は、恐る恐る後ろを振り返つて見た。するとそこには……

「ちよお～とやり過ぎだよなあ」

「は、はひ。ほへ……。」

痴漢の股間の物を握り締め、デカすぎるその股間の槍をアヘ顔を晒す痴漢の後ろの穴に抜き差しする妹がいた。

「多少の悪戯なら許してやつてるが、どうやら誤解してるようだなあ」

――こいつは私のだ

思わずちよろりと何かが床に垂れ、トウンクと何かがときめいたように感じた。嘘だ……下劣下品最低なはずなのに私の心は何故か刀華が一瞬かつこいいと感じてしまつた。

「わかつたか、返事イ！」

「ひや、ひやひ、しゅみまへんへひた……。」

そう公衆の面前で大胆にも痴漢を犯し謝罪させると、刀華はその痴漢から肉槍を引き抜き床に打ち捨て、その肉棒を静かに納刀した。

「お姉ちゃん」

「ひや、にやに……」

「学校行くよ」

そう言うと刀華は私の手を優しく握つて、いつの間にか停車して空いていた扉を抜け、モーゼの海割りの如く避けた人混みを進んでいく。

俺はその時頭がどうかしていたのか目がおかしくなつていたのか……堂々と俺の手を引きながら前を歩く刀華の背中が本当に不本意ながらかっこよく、頬もしく見えてしまっていた。クソ……

正体現したね

「オラッ！ 孕めよ新しい命ツ！」

ゴールド・エクスヘリエンス

「オ、オンツツツツ！」

「凛として咲かせてみせろアナルローズ（字余り）」

「尾尻さん許して、お尻がおまんこになっちゃうツ!! ほつほつホアアーツ！ ホアーツ！」

校門前からでも感じ取れる濃厚な淫臭と水氣、謎の語録や獣の咆哮が飛び交う今日も今日とて平常運転平和な我が校。

いつもならシャツトアウトしている情報が今日は濁流の如く頭の中に入つてくる。というのもこれも全て百合川刀華つて奴の仕業なんだ。

あいつに朝から下着を奪われ、更に公の場で尊厳まで蹂躪され、今の俺は次は何がどこからいつ襲つてくるんだと気が気でなかつた。

ましてや現在進行形でニヨニヨとした顔で俺を強引に引っ張つて汗だくの運動部が多い校庭をわざと横断するのだから警戒するのも無理もない。ただでさえヤリチンで危険な運動部が運動して体が熱つているのだ。体温と共に性欲も高まつてゐるのか凄

いギラギラとした獣のような視線を全身に感じるコワイ。

「ねえお姉ちゃん」

「な、何だよ」

「そんなにビクビクしてたら逆に不自然で目立つよ？　というか実際目立つてる」

「だ、誰のせいだとひやえつ♡」

むにゅりと、歩幅を合わせて隣を歩いていた妹が俺が言葉を言い切る前に尻を鷺掴みにした。

全くの不意打ちに思わず情けない悲鳴が飛び出る。

「や、やめつ♡」

「いきなりきよどつてどうしたの？　皆めつちや見てるよ？」

「お、お前えうつ！」

「それとこれ、はい」

「ツツツ♡!!??」

突然、肛門にズドンと衝撃が走り、頭の中が弾けた。咄嗟に口を押さえ、声を押し殺す。力の抜けそうな体を根性でなんとか支え、まともに思考ができないまま何をしたと妹を睨みつける。

「お姉ちゃん、昨日のことでお尻のガバガバ具合が気になつて挙動不審なのかもしけな

いと思つて栓してあげたんだよ。感謝してよね」

「フーッ♡ フーッ♡ お、おみやええふじやけりゅなよおお!!??」

恐る恐る手を後ろにやれば、何やら硬い円形の何かに触れる。
怒りのあまり妹の腕を手の爪を立てて掴む。

ツてえ……

「お、お前ほん、本当にフーツ フーツ いい、いい加減にし、ブフーツ あ、あんまり調子に、にフーツ のるにやヒツ……」

「いってーなあ、あんま調子に乗るなよ。」

さつきのにやけ面が嘘だつたかの如く無表情に切り替わった妹。あまりの切り替わり様に体を駆け巡る快感も忘れる程の恐怖を覚えてしまう。

なんなんだ、こいつは本当に俺の知るあの妹なのかと思わずにはいられない。それほどまでの豹変。

「人が善意でやつてやつてんのによお、ありがとうとか言えないのかガキ」

「うつえあ……」

「今までお前のことを思つて言わなかつたけどよ……今日この際はつきり言うわ。今日はお前の貞操が無事なのは全部私のおかげだからな？ あつ？」

「うつう……」

妹に頭を掴まれているからか顔も晒せない。ましてや周囲の人間も押し黙り大きく避ける程の圧力……体は勝手に震え、涙が滲んでくるし頭の中は何が何やらで分からなくなってきた。

「だ、誰か助けて……！」

「お前が性に対して拒絶的だつたから幼い時から周りに睨み効かせて最後の一線は越えさせないようにしてきた。近所や通学路、この学校全体にだつてだ。お前はそれがわかつてんのか、あ、ア、ツ!?」

「う、えつ、えう……」

妹の怒号にもはや男だの何だのといったプライドは吹き飛び俺はただただ目の前の存在に恐怖し、体を硬直させ口から音を出すだけのものに成り下がつていた。

「たくつ、何泣いてやがんだ外で。まるで私がいじめたみたいじやんさ、なあ？　おい、そこら辺どうなんだよ。何とか言つたらどうなんだ？」

「ひついつ……！」

俺の腕を掴む妹の腕に力が入り痛みが走る。もう視界は涙でぼやけ、下は膀胱が決壊寸前、心は恐怖心ただそれだけで破裂しそうになつていた。

「うつうつ、刀華は、はつ！　何も悪く、ないです。お、俺が全部悪いでしゅ……！」

「うつうつ、刀華は、はつ！　何も悪く、ないです。お、俺が全部悪いでしゅ……」

「はーん？ ふーん？ ジヤあ何か言うことあるんじやあない？」

「は、はいい。あわ、謝りましゅ。ご、ごめんなひやひ……！」

「それだけか？」

パチンッと尻を叩かれる。

「ひゅつ……い、今までっでっ、おつ俺をまも、守つてくださり……あ、ああありがとう
ございますうつ、うう……グス」

「そうだよなあ？ 私に対しての感謝だよなあ？ よしよしんじやあよお、今までのぶ
んのお返しも貰わないとだよなあ？」

「ヒュツ…ヒツ、はい！」

突然、無表情だった妹が更ににちやりとでも鳴りそうな気味の悪い笑みを浮かべた仄
暗い表情に豹変し、俺の顔を見下ろす形で覗き込んでくる。

立て続けに感じる恐怖から俺は妹に対し咄嗟にはいと肯定するしかできなくなつて
いた。

「私もさあ、色々溜まるもんがあるんだよねえ……だからさ日頃のスキンシップは全部
許容してくれよ、な？」

「ヒツ、は、はい……」

「ああ、終わつた……」

欲しかった返事が手に入り満足したのか妹が一瞬でいつもの妹に戻つたことで俺は自分のぎりぎりで保つていた平穏がついに崩れ去つてしまつたことを悟り、そう感じざるを得なかつた。

そしてそんな俺をまるでさつきまで何もなかつたかのように手を引いて学校玄関へ向かう妹の背中を見て、俺は妹に対しても恒常的な恐怖心を抱くしかなかつた。

まつた……

「あ、お姉ちゃん。今日一日お尻の栓はつけてなきやだめだよ？ 私が外すまでつけてなきやお仕置きだから」

「うん……」

妹の弾むような言葉が嫌に響く。

現実逃避気味なのか今だけはお尻の穴から昇つてくる感覚が心地よく思えてしまう。クソ……：

勝つたな。風呂入つてくる。

俺は刀華に恐怖を植え付けられてしまつた――

——そんなわけねえじやん！（憤慨）

あれは場を凌ぐための何かあれだ演技だ演技！　俺がちんこでもの考えてるようないキリ妹に屈するわけねえだろうがよッ！

時は昼、場所は校舎の屋上。妹から解放され、トイレで早急に尻のアレや体の汚れを落とし、何とか平穏な日常に戻れた俺は授業もそここに昼休みまで適当に過ごし、同級生で唯一心の許せる親友といつものように屋上で弁当を食べながら駄弁つっていた。

「てなわけで悪いんだけど手えかしとくれセイちゃん

「別にいいけど……それ大丈夫なのネコちゃん……？」

「大丈夫、問題ないよ」

「んんん、不安だなあ」

物集女清芽^{もずめせいか}。黒髪ショートでグラマラスな体に日焼けが似合う陸上部にいそうな

女の子。でもそれに反して本人は運動音痴でゲーム一。

例に漏れずふたなりだがこの世界では珍しく清純でとても良い娘ちゃん。前世の価値観で固まっている俺的に惹かれるのは当然だつたわけで、今じや両親と同等なくらいには心を許せる親友だ。

「まあ私はネコちゃんがそう言うならいいけど……具体的にどうしたいの？」

「妹に仕返しも兼ねて上下関係をはつきりさせたい」

「ええ……」

ちよつと困惑気味なセイちゃん。

わかつてる、自分が大人気ないことを言つてているということは……でもこれだけはどうしようもないんだ。何せ最近洒落にならない被害を被つていてるわけですし……これ以上妹が調子に乗つたらきつと取り返しのつかないことになる。そう半ば確信している。

「だからお願ひ、御礼はちゃんとするからさ」

「うーん、正直私が巻き込まれないか不安だけど、手伝うつて言つたし手伝うよ」「わあいありがと」

何だかんだ言いつつも手伝つてくれるのがセイちゃん。その優しさに最近荒れ気味な心が癒されるわ。結婚しよ。

「まあ、とは言え私にできることなんてあんまないから期待はしないでよ？　てなわけではいコレ」

「ん？　何これ」

唐突に投げ渡されたものは小さな小瓶。ラベルも何も付いておらず中には若干どろりとした淡いピンク色の液体がたぷたぷと満ちている。

「それはうちの会社で開発してるやつの新作。まあ簡単に言えば超やばい媚薬の原液。うちのバカ親が何を考えてんのか持つてけって……はあ、私には必要ないものだから使いいなよ」

「お、おお」

色的にアレかなと若干予想はしてたけど案の定媚薬だつたわ。流石ヌキゲーワールド。期待を裏切らない展開。

とは言つてもセイちゃんの家のこと考えれば当たり前なんだけどね。セイちゃんのご両親は謂わばアダルトグッズと医薬品の大手メーカーに勤めているわけで。ましてや研究開発部門の代表取締役なんてエリートさんなわけで。

セイちゃんはたまにこうやって在庫処分つて名目で薬品をくれる。

「あ、直で触っちゃダメだよ？」最初の数分は何ともないんだけど遅効性で、二、三分で効果出てきてすぐ感度3000倍くらいになるから。効果時間的に数時間はまともに

動かせなくなる

「え、こわっ」

「取り敢えず用法的には浴槽に小匙一杯分位で理性が溶けるくらい発情つて感じかな」「うわあ……」

とんでもないもん貰つちやつた……

「でもまあありがと」

ちょっと何か怖いけど、でもこれなら妹に上下関係を叩き込むどころか逆に堕とすくらいまでできそう！

これは勝ったな！ ガハハ！ 帰つたら風呂準備しなきや！



——と言ふわけでやつとこさ風呂の時間がやつてきた。待つてたぜエ!! この瞬間をよオ!!

いやはや、思い返せばここまで道のりがまた長く苦しい戦いだつた。なにせ妹に怪しまれないよう本当に本当に不本意ながら俺は自分の尻に今朝抜いたアレをまたハメ直し、学校帰りから現時点まで、その……散々虐められたのだから……

だが妹よ、お前の悪行もここまでよ。成敗！

「はつ、えつ？ はつあつ？ ン オオ、オ、オ、オ、オ、オオツツツ????? ♡♡!♡」

デデツデデツデケデケデン！ 反撃は成功だ!!

媚薬丸々一瓶溶かした風呂に、打ち合わせ通りセイちゃんからの電話に応じる形で一番風呂を妹に譲つてやつたぜ。ククク……脱衣所から風呂場を覗き見していたが、凄まじい獣の咆哮だあ。

「凄い声だなあ」

「はつ♡ へつへつ！？♡ て、テメエこのメスガキイイツツツ??♡♡」

「うわきつたねえW、くつさ♡ くつさあ♡ トウカちやま自分の精液風呂なんかに浸かつてきつちゃなあいW W W」

「フーツ♡ フーツ♡ コノツア、メスガキイ♡!!」

「うつせえ無様に精液スプリンクラーにでもなつてろW W W」

——バチンッ!!

そう言い放ち俺は、ふーふー鼻息荒く鬼のような形相でこちらに手を伸ばしてくる妹を他所に、精液混じりの汚い水面から突き出た肉の棒を思い切りビンタしてやつた。

「お、おつほおあアおおオ、オオ、オ、オ、!!♡♡♡」

——ビュルルルルルルブビュルビュルルルブピツッ!!

瞬間、漫画やアニメ中でしか聴けないような音を伴つてとんでもない勢いで文字通りスプリンクラーのように白濁液が天井にあたつて狭い風呂場全体に飛び散った。

ちよつと何か色々おかしくない?

「ほえ?」

あまりの非現実的な光景に唖然としていたためかその精液が俺の顔にも降り注いだ。

「はつ、あつ? アツ ツツツ??!!??」

突然腰がガクガクになり、崩れ、意識が途切れ途切れに飛ぶ。股下には何やら生暖かい感触も……

「いつ イウツ オ、ツ?? ホオ、オ、オ、オ、オ、オオ、オオツツツ!!??!!」

あつ これまずツ……トブツ

そのまま意味も分からず俺の視界は暗転した。

一転攻勢

「くお、ここあ……？」

瞼を開けば白一色。寝起きのときの様に霞んでいた視界が鮮明になつてくると自分が風呂場の床に寝転んでいることに気づく。

そして自分が全裸で両手両足をタオルで縛られ、まるで打ち上げられた魚の様に体を引き延ばされていることにも。

「な、んな！ 何だよッ！ こ、れえッ！」

腕のタオルを解こうともがくが湿つてているためか中々解けない。むしろぎちぎちと逆に締まつてきてる氣もする。

「おはようお姉ちゃん。いい夢は見れたア？」

「んなあ！」

ガララと風呂場の扉が勢いよく開かれ、そこから全裸の妹が仁王立ちで現れた。なんか笑顔なのに凄まじい圧力を感じる。今にも周辺の空間が歪みそうな雰囲気。これは……“おこ”ですね。

「と、刀華！」

「まつたく小癩なことしてくれたねえ。まあ一本取られたって感じ……お姉ちゃんのくせにさ」

——褒めてやるよ。

そう告げた途端妹の顔からストンと表情が抜け落ちた。

それがあまりにも恐ろしくて一瞬息が詰まり、体がぶるりと震える。

や、やばいやばいやばいやばい！！

「あ、あの」

「うん？」

「こ、今回のこととはですねその、お……え、あう、うう……え、えへへ？ 笑つて許して
？ みたいな？」

何を口走っているのかと冷静な自分が心の中で叫ぶ。そう思えども妹の圧の中にてられた体は屈してしまっているのか勝手に精一杯の媚び媚びな表情と声で妹のご機嫌伺なんかをしてしまっている。

もはや心と体の乖離が激しくどうしようもない状態だ。

だがどうやら奇跡的にも願いが通じたのか、刀華から重苦しい圧がさっぱりと消え去り、その顔には花が咲いた様な眩しい笑顔が浮かんだ。

「だあめ♡」

「え、
えへ？」

——縛られた体を持ち上げられ白い固形物とピンクな液体に満たされた浴槽に投げ入れられた。

体がびくんびくんと大きく跳ねる。浴槽の中身がばつしやばつしやと跳ね、その跳ねたものがまた全身に打ち付けるように降りかかる。

アクメ地獄！ 体の内側から快感が爆発し、その余波が脊髄を上り脳にぶつかる。そして脳みそもバチバチと電流を流されたようなアクメ地獄に苛まれる。

「アツ♥ これ死ぬ♥ 死ぬツツボボボボボボボツ♥ ボウホウ！ ブオオオバ
オウツバ！ ♥♥ だずげで！ 殺されつ、ちやボボボボボ！ たすけて！ ♥♥♥ とう
か！ たすけドボボボボボボ！ ボウホ！ ♥♥♥♥

かボボボボボボボボボボたすけて!!
ンとおか

「——てめえ今他の女の名呼んだなツツ!!??!!」

!!!!???

もはや何が何だかわからないが突然体が浮き上がる。その際重力に従い液体が体の表面を流れ、強烈な快感に襲われる。体がびくんびくんと大きく暴れ快感を逃がそうとするが、しかし快感値がリミットブレイクしていく逃がしきれない。俺の体はあわれにも下品に踊り狂うはめになつた。

それから暫く、ようやく快感が収まり息も絶え絶えに霞む視界で何とかまわりを確認すると、どうやら俺は刀華に縛られた腕を捕まれ宙にだらりとぶら下げられているようだつた。

「てめえ、私というものがありながら他の女に現を抜かしやがつてエツ……」

「ヒュツ、ヒュウ、ハヒ、ヒツ、にや、にやにをいつへ」

「“せいが”って言つたよなあ？」
今確かによお？』

「にや、なんつ
のことでひゆ、かあ
？」

「とぼけんなよメスガキ。」

唐突にビンビンに勃起したデカ乳首を捻り上げられる。あまりの快感に絶叫してしまい、その際尿道が開いたのか勢いよくおしつこを漏らしてしまう。

尿道を液体が通る淡い快感と乳首の痛みを伴う鋭い快感のギャップで脳がアクメショートを起こしてしまう。

「てんめえこのメスガキ！　ご主人様に向かつて小便ひつかけるとはいひ度胸だなあツ
!!　てめえがマーキングされる側なんだよ♡」

「お♡」

空中で吊るされていた体が突然降ろされた。力の抜けた体がびくびくへにやへにやと風呂床に崩れ落ちる。

何とか起きよう、そして逃げようと辛うじて動く腕でずるりずるりと扉の方へと体を引きずる。

だが少し体が床と擦れるだけでも快感が生じ、その度に体が痙攣し、動きが止まつてしまふ。は、速く逃げないと♡

「何床オナしてんだこの変態猫♡」

「おっほ♡」

芋虫のように這つているところ、いきなり無駄に肉付きのいい尻肉をバチンと叩かれた。床にぴったり密着しているせいか衝撃が逃がせず体に響き勢いよく潮を吹いてしまう。

「尻叩かれて潮吹くとは救いようのない変態だな♡　仕方ないから私のこの肅清液注入棒で救済しちゃる♡」

「え……あ、ああ！　や、そこはやめ♡」

「墮ちろ。」

ズドンと巨大な杭が撃ち込まれる。俺のクソ雑魚アナルに妹の黒光り巨大バカチンポがずつぶりと突き刺された。

そのあまりの衝撃に体がのけぞり、足先がピンと延び、手を強く握り締め、声にならない長く巨大な絶叫が喉を通り過ぎていく。きっと顔も涙やら鼻水やら唾液やらで絶対に人に見せてはいけない表情になつていることだろう。

「くくくツツツ!!!!♡♡♡」

「まだまだア」

「お、ほおツ！♡ やツ♡ や、め、ツ！♡」

体の快感を鎮める暇もなく妹はばつちゅばつちゅと俺を押し潰す勢いで腰を降り始める。

や、や、め、て、え、え、くくツツ♡♡♡

「んつ♡ ほらつ、お姉ちゃんつ♡ なにのびてんのツ！ まだまだこんなもんじや、な
いからつ、ねえツ♡」

「ひ、ひいいいいいいいいツツツツツツ!!!!♡♡♡♡♡♡」

妹のケダモノぶつとびピストンによりぶつぽふつぽばつちゅばつちゅと汚い水音が風呂場に響き渡り、また、ぶぶぶびぶぽぶぼと恥ずかしすぎる気泡が俺の尻穴から漏れ

る音も耳に入つてくる。

快感と羞恥心とで俺という存在がかき混ぜられていくようだ。

「ごめんなしやいいい♡♡ 許してくださいひいいいツつ！」

私が満足するまでてめえはアクメ感じてや
「うるせえ！ 生意気なメスガキがよお！」
がれツ！ オラツ！」

「ンもうお!??」

突然顔面に何かを塗られる。匂いからして沿槽の中の媚薬入り固形精液のようで、俺はたちまちに頭をぶつ飛ばされる。

しかし妹の猛攻は止まらず、それだけでは飽き足らずついには後ろからべつたりと抱き着かれてしまう。その際胸肉と乳首を腕で強く締め上げられ、それだけで耐え難い快感に襲われる。

た。 もはや脳はどうどろに溶かされ尽くし、俺はただ絶叫し続けるナマモノと化していく

そしてついに、妹のピストン運動の勢いが増したその果てに――

ドビュルルルルルルルルツツツツツツ

もはや液体とは呼べぬ大量のそれを腸内にまき散らされる。いやまき散らすという

よりは腸内を埋め尽くされるが正しいだろう。

しかしそんなことはもはやどうでもいいぐらいに俺はぐつてりと潰れた蛙のように床に這いつくばり、ただただ快感に身悶えるばかりであった。

「んふう～……F O O → 気持ちい～♡ お姉ちゃんのお尻、最高だつたよ♡」

「あ、あえ……」

「ん、ちょうど催してきた……ふうう」

じよぼぼぼぼぼぼ……

「お、……♡」

ダメ押しとばかりに、精液詰めにされたお尻に大型動物もかくやな量のおしつこをされてしまった。

「マーキング完了だねえ♡」

そんな嬉しそうな妹の声を最後に俺の意識は途絶えた。

デート・ア・バイブ

「いーやーだー！　ぜつつつつみたい行かないいツツ!!」

「はいはい、いいから行くよ」

本日は晴天、休日であり絶好の外出日和。

以前、妹の親友——入好さんの寝具に粗相してしまったお詫びにショッピングに行く約束をした。その日が今日であるのだが、俺は約束を反故にしてでも、トイレに籠城するという醜態を妹の前に晒してでも外出したくなかった。

「ちょっとお、待ち時間に間に合わなくなるからいい加減出てきてくんない？　マジ害悪」

「害悪なのはお前だろがい！　こんなビツチもビツクリな服装で外を歩けるかバカツ！」

朝、目を覚まし布団から出て着替えようとしたときのこと。部屋に突然妹が乱入してきて特殊部隊もかくやな驚くほどの手際の良さで俺を拘束。何かで意識を飛ばされ、再び目を覚ましたときには破廉恥極まりない衣服を着せられていた。

ノーブラで、丈が短かすぎてお臍どころか胸下の肋骨あたりまでこんにちわしてる無

地の薄い白Tシャツ。下はミニもミニな赤スカートでもはや黒の極小紐パンが隠せていないしなんなら腰に紐がかかるのも見えてしまっている。白黒ストライプなニーソは若干締め付けられ気味で気になつてしまつてしようがないし……。

こんな格好で人前に出れる訳がない。古事記にもそう書かれている。

「俺はまともな格好ができるまで絶対にここから動かないからな！」

「そう」

「アイエ？」

ガチャヤリといともたやすく開いた扉。そして便座に座る俺の目の前に歩み出てきた妹。鍵をかけていたはずと焦りながらあたふたと視線を彷徨わせれば目についたのは妹の親指と人差し指に摘まれた歪んだ針金。

——ピッキング！

「よくも手間取らせやがったなボケ」

「ア、アイエエエ！」

「もう逃げられないゾ♡」

頭の中に鳴り響く警告音に従い、急いで妹の脇をすり抜けようと身を屈め前に出る。

しかし——

「神妙に大人しくしろ♡」

「ぐえ」

そのまま体を脇に挟まれ捕まつてしまつた。
と言うか神妙に大人しくつて言葉はおか s —

「ヒヤン!?!」

「これは罰だからねえゝああケツドラムゝ
や、 やめヒイン!」

その後小一時間、 赤い手形が複数残るほど俺は尻を叩かれ続けた。
時間ないとか嘘じやん……痛い……

「さて、 そろそろ行きますか

「うう……勘弁してくれ」

「ダメでーす。 現実を受け入れてください」

これが夢ならばどれほどよかつたことか……それにしてもほんま腹立つなこいつ

……

シコるしか能のないシコ猿チンポ脳がよ……

「——ア、 アンツ?」

「ひよつ!?!」

「今なんつったクソガキ!! お仕置きが足りなかつたかな♡」

や、やべ……声に出ちやつてた……!? 速く逃げないと……!

「放せコラ……放せコラ！ 馬鹿野郎お前放せコラ！」

「おーおー抵抗しても無駄だぞボケ。暴れんなよ暴れんなよ w」
じたばたと力の限り暴れてみるも刀華はびくともしない。片手で人一人抱えてるのに不動つてどうなつてんだお前の体幹！ クソクソクソクソ……！

「いや、今日は楽しい日になりそうだねお姉ちゃん。今からお前に罰を与えるからなあ」

そう言うや否や、まるで最初から用意していたかの様に刀華はポケットから粘着テープとピンクや水色、黄緑色などのカラフルな球体状の物体を複数個取り出し、見せつけてきた。中にはクリップが付いているものまである。

「え、何それは……？」

「無線ロータード！」

「ホツ!?」

「これを今からお姉ちゃんの性感帯に取り付けていくからねえ！」

馬鹿だろコイツ!? こんな裸に近い全裸よりも恥ずかしい服でロータードなんて……
もはや隠せないだろそれ!?

とてもたまつたもんじやないという思いで俺は再度全力でもがき暴れる。

それでもやはり抜け出せない。なので俺は苦し紛れに妹の尻を思いきり叩き、爪でつねつてみた。これで一瞬でも拘束が緩んでくれれば……

「イツタ!? おいクソガキッ！」

「あつあつ……」

「もつとか!! きついのもつと欲しいのか? もつと……イヤしんぼめ!!」「な、な!?」

まずい、余計怒らせただけだつた……! 逆に腹が締め付けられる程抱えてる腕に力入つてきてる。圧迫感やばくてちょっと苦しくなってきた。

「取り敢えずまずはこれ着けてやるから大人しくしてろよカス。抵抗したら殺すぞボケツ」

「ピヤツ?!」

怒鳴りながら刀華は俺の身体を仰向けに地面に転がし、腹の上に膝を乗せて床に拘束してきた。お、重いし痛いし動けない……!

「ど、刀華……お、重い、どいて……!」

「うるせえッ! さあまずは上の二つの雑魚突起に着けようねえ⁽^⁾」

「ひやつ!? や、やめ⁽^⁾ オ、ツ?!⁽^⁾」

バチンとクリップが思いきり両乳首を締め上げ、一瞬電撃が体を駆け巡った感覚がし

た。その後もじわじわとした痺れが乳首から継続的に神経に響く。

「ええ W? お姉ちゃん下がもうびしょびしょじyan。こんなのもう気持ち良くなつてるの W?」

「う、うるわや……」

「上だけじやバランス悪いから下にも」

ギツ
?!
心
一

クリトリスをクリップで潰された際、ぴゅつぴゅつと2回程何か股から漏らした感覚がした。

な、なんで俺がこんな目にあわなければいけないの……

「あーあ、もうパンツびしょびしょじやん。こんなんで今日一日耐えられるの?」
「ハヘーッ ハヘエ♡」

「んー駄目そう?
でも残念。口一タ一はまだ沢山余つてるよ♥」

ひええええええ…

「それじやあ残りはお尻の穴に詰め込めるだけ詰め込もうかあ！」
「ば、バカやめろ馬鹿ッ!?」と、取れなくなつたらどうす

はい一ちゅ

「ニヤツ!?」

「はいにーい♡」

「ピヤツ！♡」

「さあん♡」

「ホオオ、♡」

「よおん♡」

「オ、ホツ♡」

「はいゞーお♡」

——総数、計14個。ゆつくりと焦らすように、嬲るように俺は尻の中にローターを押し込まれてしまつた。

ただでさえ肛門が何故か過敏になつてゐるのにこんなことをされて、もうお腹の異物感で気持ち悪いのか気持ちいいのか頭がごちやごちやしてよくわからない。俺の心はボロボロだ……もういつそのこと殺してほしい……

「なうにもう終わつたみたいな顔してんの？　まだお仕置きは終了してないよね？」

「ええ？」

「買い物中にローターうんちお漏らししたら大変だからね、蓋しないとね。ね、お姉ちゃん？」

「ヒュツ……」

徐に胸の谷間に手を突っ込んだ刀華。回らない頭と涙でぼやけた視界でただ眺めていた俺はそこから取り出された物を見て息が詰まつた。

それはバイブと言うにはあまりにもエグすぎた。大きく、太く、長く、そしてコブだらけすぎた。それはまさに凶器だった。

やばい、殺される。マジで殺される。あんなの突っ込まれたら確実に死ぬ……！

門裂傷死とかふざけた死因、俺はごめんだぞ……！」

—ウワアアアアアアアアアアアアアア!!

「うるせえ！」

「やだやだやだやだ！ そんなの入れられたら死ぬ！ お尻裂ける！ ふざけんなバカッ！」

「ケツなんてな、最初から割れてるんだ。何も問題ないでしょ?」

「割れてると裂けるのは別にきまつてんだろアホッ!? 脳味噌ついてんのかお前!?」
「ガタガタうるせえしぞよ、馬鹿野郎! こんなので死なねえ安心して、いんぞよ

「バカツ！ アホツ！ うんちつ！ インポツ！」

「いい加減にしろやガキ！ そら挿入！ 挿入取消！キヤンセル 挿入！」

「ソニヨオオオアアアアアツツツ
!?! ♥ ♥ ♥」